本当の想い、偽りの想い

香坂翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
本当の想い、偽りの想い

【Ｎコード】
Ｎ４２０２Ｉ

【作者名】
香坂翔

【あらすじ】
目を開けたらそこは異世界だった……
自分はその異世界で日々を暮らしたのだと言われる。
自分の暮らしてきた元の世界での１６年間の想い……
異世界で皆が自分に抱いた１６年間の想い……
どちらが本物でどちらが偽りなんだろうか。

※最新話をご覧ください。

第一話　消えてしまった想い（前書き）

「本当の想い、偽りの想い」の主人公の元いた世界は、私、香坂翔が連載中の「夢幻の想」の舞台となっている世界です。

第一話　消えてしまった想い

目を開けるとそこは、見知らぬ部屋だった。

昨日、俺が眠っていたはずのベットも俺の記憶に無い物に変わっている。

部屋の雰囲気もおかしい。

自分の部屋も洋風だったがこの洋風の部屋は古い感じがする。

俺の脳は全力で今の状況を考えたが当然の結論に至った。

「おいおい、ここ何処だよ・・・」

誰に聞いたわけでもないその疑問を答えてくれる者はいなかった。

俺は、通常(ふつう)の人間が体験しないような異常な世界で暮らしてきた。

しかし、そんな俺でも体験した事の無いほどの異常(イレギュラー)だ。

異常(アブノーマル)な世界にいると異常中の異常が次々と現れる。

そんな時こそ慌ててはいけない。

自分に落ち着けと何度も言い聞かせるがあまり落ち着けない。

まずは、外へ出てここがどこかを確認してみよう。

ベットから起き上がり、俺は外へ出ようとした。

「ただいま～」

そう言って一人の少女が家に入ってきた。

１５、６歳辺りで自分と同年代ぐらいの長く蒼い髪が目立つ少女・・・

誰だ？そう思ったが俺の口は何故か勝手に動いてしまった。

「イヴ・・・」

イヴ、誰だそれは？というかなんで俺はその名を口にしたんだ？

目の前の少女とは初対面なのだがどこか懐かしいような今までずっと一緒にいたような気がした。

どさっ

イヴという名前を口にした途端、彼女は持っていたカバンを落とし、泣き出してしまった。

俺が何かしたか？

いや、俺がここにいるから泣いてるのか。

いきなり知らない男が自分の家に入ってきたら驚くだろう。

もしも俺の部屋に知らない男が入り込んでたら絶対に締め上げる。

ましてや少女の家に勝手に見知らぬ男が入り込んでたら恐怖以外の何物でもないだろう。

「ぁ、えっと」

俺はとりあえず謝ってすぐに家から立ち去ろうと決意した。

しかし、彼女がいきなり俺へ抱きついて来たことによって、焦ってしまい、謝罪の言葉を口にすることができない。

「や、やっと目を覚ましたんだね。ねえ、ヴァン・・・私ずっと待ってたんだよね・・・」

泣きながら俺に話しかけてくる少女の声はうれしそうで俺を力いっぱい抱きしめた。

あきらかに俺を誰かと勘違いしてるよな?

俺は、この部屋も俺に抱きついて泣いている少女も知らない。

とりあえずこの子に別人だということを理解してもらわなければならない。

「なぁ・・・」

「何?」

少女はうれしそうに俺の言葉を待った。

「ゴメンな・・・」

とりあえず俺がヴァンっていう人じゃ無い事を謝らなければいけないだろう。

「どうしてヴァンが謝るの？謝るのは私の方だよ・・・」

少女はまだ少し涙を流していた。

「俺は、君が言うヴァンって言う人じゃないんだよ・・・」

正直に言った方がこの子のためだろう。そう思い、真実を言った瞬間、彼女は俺から離れ、戸惑った表情でこちらを見上げた。

「なんで・・・、なんでそんなウソ言うの？ヴァンはヴァンでしょ・・・。私の名前だって覚えていてくれた・・・。イヴって言ってくれた・・・」

彼女の声は震えていた。当然だ。会って涙する程の人物から他人だと言われたのだから・・・

「俺は、ここを・・・、君を知らない・・・。俺の過ごした１６年間に君はいないんだ・・・」

あまりにも言いづらかった・・・

少し触れただけで崩れてしまいそうな程に、目の前で先ほどとは違う種類の涙を流している少女は、儚く思えた。

「でもヴァンは、さっき私を見てイヴって言ってくれたよ？私がヴ

ァンと一緒にいた日々は、私しっかり覚えてるよ？ヴァンは、私の事覚えてない？私とヴァンは・・・、一緒に旅をしたんだよ？ヴァンは、この部屋覚えてない？少しの間だけど私とここで暮らしたんだよ？ヴァンは、私を一生守るって約束してくれたよね？ずっと一緒にいるって約束してくれたよね？ヴァンは・・・、ヴァンは・・・」

先ほど俺が口にした名前は、やはりこの少女、イヴの名前だったのか・・・

でも名前を知っていても俺はヴァンじゃない。

掠れ声で俺にヴァンへの想いをぶつけるイヴは、辛そうだった。

いくらイヴが俺をヴァンと呼び、溢れ出す涙と想いを俺にぶつけたところでヴァンという人物では無い俺にはどうすることもできない。

まだ会ったばかりのはずの少女が悲しむ姿を見て俺の心を軋んでいった。

「ゴメン・・・。ゴメンな・・・」

俺は、自分がヴァンではないということを何度も何度も謝った。

何故俺がヴァンじゃなのかと思ってしまうほどに今の状況が口惜しく感じた。

しかし俺はヴァンではない。

イヴがほしかった言葉とは、かけ離れた言葉・・・

イヴが求めている言葉とは正反対の言葉しか俺は言うことができない。

そのまま何分間の沈黙が続いただろうか。

イヴは涙を堪え、俺を見据えた。

イヴの雰囲気は先ほどのと違いなにかを決意したような表情だったがまだ涙は溢れ、平気な風に強がっているようだった。

「ねぇ、ヴァン・・・」

まだ少し涙を零しているイヴは俺へと言った。

「きっとヴァンは記憶喪失なんだよ。だから旅に出よ?」

今のこの子には、誰かがついていなきゃいけない。

俺は、そう思った。

少しずつ自分の事をわかってもらい、ヴァンを探す旅にしよう。

玖澄香夜(くずみこうや)としての記憶を持っている俺の記憶探しの旅が始まった。

第一話　消えてしまった想い（後書き）

いつも悲しい雰囲気なわけではありませんがこの話を書く上で一話目は必然的にこういう感じになってしまいました。

第二話　自分の身体？

「言っとくけど俺の名前は玖澄香夜（くずみこうや）だ」

出発する前に俺が玖澄香夜でヴァンではないという事をわかってもらえると旅が非常に楽になる。

ヴァンに縁（ゆかり）のある地を巡るのは賛成だ。

しかし、俺が玖澄香夜である以上、ヴァンとしての記憶を思い出すなんていうことは不可能だ。

一番効率的なのは、ヴァンに縁のある地でヴァンの手掛かりを探すことであって、それをしない限り真実に辿り着くことは難しい。

そんなわけで俺とイヴは、まだ部屋を出ることなく、ベッドに腰を掛けながら討論をしていた。

俺は何度も自分がヴァンでは無い事を説明したがイヴは予想通りの返答をした。

「ヴァンはヴァンだもん。それにそんな変な名前の人いるわけない」

イヴも大分落ち着いて少しぐらい強く言ってもまったく問題が無くなった。

この少女は頑固だ。

俺の存在も名前も全否定で俺がヴァンであることを疑わない。

「大体、俺とヴァンって奴はそんなに似てるのか？瓜二つだったりすんのか？」

ここまで頑固に別人だって認めないなら姿もそっくりなんだろうな。

今までそいつがいた場所にそいつと同じ姿の奴がいて、別人ですなんて言われたってなかなか信じられないかもしれない。

そんな事を考えてた俺にイヴは衝撃的な事実を口にした。

「髪と眼の色が違うけどそれ以外は全部ヴァンだよ。顔もしぐさも雰囲気も全部ヴァンだよ」

イヤイヤイヤ、髪と眼の色が違う？それって明らかに別人じゃねえか！

「ちょっと待った」

「何？」

なにも変な事は言っていないといった感じでイヴは、俺の言葉を待った。

「ヴァンの髪と眼の色は？」

「白銀の髪に澄んだ蒼い眼だよ」

「髪と眼の色が違うっつったら明らかに別人じゃねえか！！白と黒じゃ正反対だろ！なんでそこに違和感持たないんだよお前は！！」

あまりの事に俺はついつい大声で反発してしまった。

今の落ち着き具合ならこんぐらい強く言っても大丈夫だとは思うが先ほどの姿を目の辺りにした後だとやはり心配である。

しかし、純日本人の俺が銀髪の奴と同一人物扱いなんて・・・

この分だと顔も全然似てないのかもしれない。

「でも髪だって最近は黒くなってたよ？毎日眠ってて、日に日に髪に黒が混じり始めて、最後には真っ黒に・・・だから黒髪でも別に変じゃないよ」

眠り続けて髪が黒くなりはじめた？

一体ヴァンっていう奴に何が起きたんだ？

俺が来る前に髪と眼が俺みたいになった？

それじゃあ俺がこっちに来たのもヴァンが関係してんのか？

なんかわからねえことだらけだな・・・

次々と俺の頭の中に浮かんでくる疑問。

しかし、俺はその疑問の１つも理解することはできなかった。

「それに魔力が一緒だから絶対に同一人物だよ」

「魔力って何だ？」

「魔法をつかったり、自分の身体能力を上げたりできる魂を持つものなら誰もが持ってる力」

魔法って異能の力みたいなもんかな。

身体能力も上がるんなら俺のいた世界の＜気（き）＞と同じなのかな？

俺は立ち上がり、気と魔力が同種のモノかを確かめるべく、体内の気のかなりの量を身体全体へと流した。

ヴァンって奴よりも俺の方が強い気を持ってればイヴも別人だって認めるだろ。

俺は自分の持つ気を本気で体内に流そうとした。

だが俺の思惑は外れた。

「うおっ！！なんだこの力！？」

毎日の修練の賜物でかなりの量の気を持っていると思っていたが、俺の体内に流れる気は異常だ。

日々の修練で少しずつ少しずつ量と質が上がっていく気は、感情や調子などでバラつきを見せるがそれでも今の状態は異常としか言いようがなかった。

また死の淵に追いやられる程の死合いを体験すれば飛躍的に上昇するケースもあるが俺は度重なる死合いなどした事は無い。

まるで自分の身体では無いような感覚。

オイオイ・・・質は別格だし量も１０倍以上ある・・・

それに何故かまだ力が出せる様な気がしてならない。

未だ本調子では無く、病み上がりの様な不思議な感覚を感じる。

圧倒的な気は、前いた世界でもある程度の域を超えた実力者であったと自負している俺も驚愕するしかなかった。

異常だ・・・

明らかに俺の知っている身体じゃない。

自分が今流している気の異常さについて思考をめぐらしている中、さらなる驚愕の事実を知るはめになった。

「驚くのも無理はないよ。半年間も眠ってたんだもん。いつもの量の魔力が扱えるようになるまでしばらく時間が必要だと思うよ」

どうやら気と魔力は同じモノだという事はわかったが俺はそんな事よりも別の事を考えた。

俺は一体どうなってる？

イヴの言うとおり俺がヴァンだというなら長い間眠っていたせいで気が上手く扱えないのも未だ本調子ではないという感覚も納得ができてしまう。

事実、イヴが言った通りまだまだ力が出せる様な気がする。
そこで俺は気づいた。
本気を出せばまだ力を出せてしまえるような気がする。
気は、似ていることもあるが絶対に同じではない。
ましてや自分の気を間違えるはずもない。
明らかに俺の者では無い圧倒的な量の気。でも気の感じは俺と同じだ。
イヴの発言で俺がヴァンじゃないと言い切れる部分は俺の記憶だけ。
俺がヴァンで無いと言える可能性は、自分の記憶だけだ・・・
だけど、俺の記憶には食い違いが起きてしまっている。
知らないはずの目の前の少女(イヴ)の名前を知っていた。
今の状態でどちらが合っているかと言われたら圧倒的にヴァンである可能性の方が高い。
でも俺は、自分の十六年間の記憶が偽りじゃないと信じたい。
俺が仲間に想った気持ちや日々の日常で想った気持ちは本物であると信じたい。

なぁ、俺の過ごした十六年間は確かにあったよな？

俺は、自分の十六年間の記憶に自分の十六年間の想いに助けを求めるように訊いた。

第三話　旅の前に

やっぱり外国っぽいよな～

俺の異世界での感想はそんなモノだった。

起きた時にいた部屋もそうだけど中世ヨーロッパの様な雰囲気がでている。

ときどき黒髪の人もいるけどやっぱ皆染まってるな～

イヴに連れられて旅に必要な物を揃えるために街を歩いている中俺はそんな事を考えていた。

「まずはお金よ、ヴァン」

何度俺が香夜だと言ってもヴァンと呼んでくる少女(イヴ)は、俺を無理矢理にでも旅に連れて行くらしい。

「イヴは金持ってないのか？」

「お金はあんま持ってないんだ・・・」

「イヴ、金すぐに貯まるのか？地道に一ヶ月バイト生活なんて俺は嫌だぞ」

「ヴァンは強いから魔物倒せばお金なんてすぐに貯まるわ、旅の出発は、明日か明後日辺りだと思う」

やっぱり魔法なんてあるからには、こっちの世界でも魔物がいるのか。

「魔物って高く売れるのか？」

「退治するだけでもお金になるけど、武器とかの素材だったり、薬の材料だったりすると魔物自体にも価値がでてくる」

こっちの世界じゃ魔物の有効活用されてんのか。

俺のいた世界は研究道具にされるか処分されるかしかしてないけど世界の環境ごとに違うんだろうな。

「着いた」

どうやらイヴが向かっていた場所に到着したようだ。

「ここは、酒場か？」

魔物退治に行くはずがなんで酒場なんかに・・・

「別にお酒を飲みに来たんじゃないけどね、酒場とかって依頼主と仕事をほしがってる腕利きの仲介をやってるのがほとんどなの」

へぇ～なんかゲームみたいだな。それ言ってもイヴにはわからないだろうけど。

俺達は酒場へ入ると中は、かなりの賑わいをみせていた。

今はまだ昼間だが大勢の人が酒を飲んで騒いでいる。

「昼間っから酒飲んでる奴等ってどんだけダメ人間だよ・・・」

周りに聞こえない程度の小声で俺は呟いた。

「あれは、大きな依頼を達成したお祝いみたいなものよ、ダメ人間じゃないわよ」

誰にも聞かれないように呟いたつもりが隣にいたイヴには聞こえてしまったようだ。

イヴは俺の呟きに答えると酒場のマスターの元へと歩み寄った。

「ねえマスター、今回は何のお祝い？」

「これはフェンリル討伐祝いだよ、皆街に貢献できたって大喜びさ」

「フェンリルの討伐なんてやるわね」

街のためになれて大喜びってメチャクチャ良い人達じゃん。

ダメ人間なんて言っちまったよ。

「なあイヴ、フェンリルって何だ？」

「危険度３５のここらじゃかなり危ない分類の大きな狼よ。」

へえ～、危険度ってのはたぶん俺らの世界でもあった強さを表す指数かな。

まあ、こんだけ騒ぐんならけっこう強いんだろうな。

「マスター、一番報酬金が高い魔物の討伐系クエスト受けたいんだけど良いのある？」

「最近この人達がどんどんクエストやるから魔物退治で良いのは無いな。山賊狩りなんてどうだい？街のためにもぜひ頼みたいんだけど」

「ええ、それじゃそれで良いわ」

はぁ～、一番最初から複数の対人戦か。

まあ、この世界の人間がどの位強いかの参考にでもさせてもらうかな。

第四話　イヴの作戦（前書き）

この小説を二人の方がお気に入りに入れてくれたのでモチベーション上がりました。
とりあえずそのモチベーションでもう一話書いちゃおうと思います。

第四話　イヴの作戦

俺とイヴは酒場を後にして隣の街へと向かった。

隣街に用があるわけではなく、隣街へ行く途中に用があるのだ。

なんでも山賊達は、俺が最初にいた街アグニバス（さっき始めて知った）と隣街のヴェントスを結ぶ交通路で待ち伏せをして魔力が弱く、抵抗する武器を持っていない者を狙っているらしい。

幸い隣街のヴェントスまでは2時間弱で着くらしい。

俺達はできるだけ被害が出ないよう、今日中に始末することにした。

ヴェントスへと向かう途中、俺達は作戦会議をしていた。

「まず私がいかにも弱いですっていう感じに魔力を弱めてヴェントスに向かうわ。その後ろをヴァンが1kmぐらい離れて歩いていく。山賊は私を襲って、私は、一生懸命時間を稼ぐ。そこに魔流をつかって超スピードでヴァンが私を助けに来る。完璧じゃない？」

魔流とは、最初にいた部屋で魔力と気が同じものかどうかをイヴの反応を見て確かめるために行ったあれだ。俺の世界では、気闘と呼ばれていたが魔力を身体に流すから魔流なのだろう。

気闘は、体内に気をめぐらす事によって、身体能力を数倍に膨れ上がらせる事ができる。

「俺はヴァンじゃねえ、作戦はわかったがこれは譲れない。俺は玖

澄香夜だ。」

「でもヴァンはヴァンなんだからヴァンって呼んでも構わないじゃない。そんな夢の記憶なんて関係ない。」

コイツの中じゃあ俺はヴァンであってそれ以上でもそれ以下でもなく、玖澄冬夜である可能性を検討する余地もないらしい。そして俺の十六年間は寝ている間に見た夢とでも解釈されているらしい。

ヴァンじゃねえって言う度に同じ台詞言われそうだよな。

今のイヴに俺のこと香夜って言わせるのたぶん無理だろうな〜

隣にいる少女(イヴ)は、かなり頑固だ。

自分が納得する証拠が無い限り、俺の事を香夜と呼ぶことはないだろう。

「呼び方は・・・とりあえずいいや、一人で複数の山賊相手に時間稼ぎできるのか？」

「何も戦って時間稼ぎする必要もないじゃない。お金渡すフリでもしてるからその間にヴァンが私を助けに来てね」

「あと1、2kmもしたら山賊が出るわ、先に行くから後で着いて来てね。」

もしもこの世界の人間がメチャクチャ強かったらどうしよう・・・

俺は、朝確かめた自分の異常な気のせいとその異常な気をなんとも

思わなかったイヴの反応のせいで要らぬ不安を抱えていた。

第四話　イヴの作戦（後書き）

感想お願いしま～す！！

とりあえず週１回は必ず更新したいと思います。

第五話　作戦実行！

俺とイヴは作戦を決行した。

俺とイブは、気の力を弱め一般人並に下げ、１ｋｍ程の距離をあけ、ヴェントスに向かって歩を進める。

今思ったけどこれってイヴが山賊に絡まれても俺はそれわかんないんじゃないか？

イヴが山賊の出る辺りにいる頃に俺はふと思った。

もしかしてもう襲われてるんじゃ・・・

そんな事を考えていると今すぐにイヴのもとへ行った方がいいんじゃないかと不安になってくる。

だがそんな思いも杞憂だった。

イヴの魔力が強くなった。恐らく俺への合図だろう。

しっかり合図考えてたんだな。

それにしても、あんま強くないな・・・まぁ、戦わないで時間稼ぎするって言ってたし、山賊数人相手にはきついってことだよな。

俺は、脚に気を集中させ、いっきに１ｋｍを走破する。

なんで戦ってんの・・・

戦わず時間稼ぎするはずだったイヴは、山賊四人と戦っていた。
こいつら魔法使えないのか？
山賊達は全員武器を持っていた。
イヴは、山賊達と一定の距離をとりながら山賊達へ魔法を放っている。
このままならイヴが勝つんじゃないか？
イヴと山賊達の戦闘を見ていると不意にイヴがこちらをみた。
その顔には怯えの表情が浮かんでいて、涙さえ流しそうだった。
「ヴァン、はやく助けて」
イヴがこちら側を見たその瞬間の隙をついて一人の男がいっきにイヴへと近づき、イヴの腕を掴んだ。
「さあ終わりだ、お嬢ちゃん。おとなしく金になるもん全部おいてきな」
イヴの腕が掴まれた瞬間、俺は動いた。
腕つかまれてるからこのまま殴ったらイヴにも被害がでるな。
俺は、気を手のひらに集め、針をイメージする。

気が針へと形を変え、俺の手のひらにおさまった。
その針をいっきにイヴの腕をつかんでいる手の手首へと振り下ろす。
「っっ！！」
声にならない悲鳴を上げて男はイブの腕を放した。
「そいつの手を離した時点でお前の地獄行きは決定したぜ」
まだ十分に脚に気が集まっている状態で俺は、イヴの腕を放した男の腹へと回し蹴りをした。
「安心しろ、死なないように加減してやる」
みしっ！
顔を蹴っていたら首の骨が折れていただろう。
腹を蹴られて確実にアバラが折れているであろう男は気絶してしまった。
逃げられる前に残りの奴らも片付けるか？
先ほどから呆然と仲間の一人がやられていく姿を見ていた男達は逃げなかった。
いや、逃げれなかった。
足が竦んで逃げようにも逃げれずに三人は焦りの表情をみせていた。

逃げられたらめんどうだったけどラッキー。

まあ、普通の人間ならびびるわな、魔力を感じられるなら尚更に。

正直この世界へ来てから急激に強まっている俺の気の強さは自分でもかなりびびってる。

これだけの力を持っている人物を俺は元の世界でも一人しか知らない。

「お前らも俺と殺るか？」

とりあえず倒した分と同じだけは無傷の奴がほしいな。

血を流して気絶してる奴を街まで運ぶの嫌だし。

「え、遠慮します」

そう言って、山賊達はおとなしく捕まってくれた。

なんとか初仕事が無事に終わったようでよかった。

第五話　作戦実行！（後書き）

香夜の場合は「気」香夜以外なら「魔力」って書きます。

第六話　ウロボロス（前書き）

主人公の名前を変更させていただきました。

第六話　ウロボロス

俺とイブの初仕事は無事に終わった。

盗賊達は騎士に明け渡し、盗賊達が奪った物もわかる範囲で被害者に渡されたそうだ。

俺達は依頼を受けた酒場に盗賊を捕まえたという報告をしに行った。

「危険度不明、盗賊退治完了しました」

イヴは酒場のマスターへ依頼について報告する際に騎士と呼ばれる警察のような奴からもらった紙を提示した。

その紙は、盗賊を捕まえた証らしい。

「半日で終わっちまったのか！？ずいぶんと手際がいいじゃないか」

半日で依頼を達成したことでマスターは驚いていた。

「それじゃあ、報酬を払うがどこかの個人ギルドに入団しているかい？」

個人ギルドとは、数名が団結して仕事をこなすために徒党を組み、他にも個人ギルドなどをまとめる本部ギルド、個人ギルドに入っていないが依頼をこなして生活をするために本部ギルドの下部に所属する支部ギルドがあるらしい。

そこらへんは俺の世界にもあったし、大きな力を持つ者達は自然と

個人の実力で勝てないのなら数で権力を持つという思想に至り、ギルドなどを結成する。

用は、異能やら魔法やらがある世界ではギルドというものは必然的にできるのだ。

そして問題なのがどれかのギルドに所属していないと報酬はもらえないということだ。

ギルドに入り、大きなアクションを起こすとかなり注目しされる。

誰かを救っただのならまだいいが、誰かを殺した時にその責任はヴァンがとることになってしまう。

それは絶対に避けなければならない。

「私とヴァンは、」

「俺はまだギルドに所属していません」

慣れた感じで仕事を選んでたし、イヴはギルドに所属しているのだろう。

俺は、イヴの発言を遮ってマスターに言った。

「どこでギルドに所属することができるんですか？」

「何かの依頼を達成してこの紙に必要事項を書けばギルドに入れるよ」

そう言って、マスターは一枚の紙とペンを俺に差し出した。

字が明らかに知らないモノだ。

まったくわからないはずだった。しかし、読むことも書くこともできた。

まぁ、異世界で日本語も通じてるんだからそれと同じだろ。

俺はあまりそのことについて興味を抱かなかった。

紙に名前、性別、年齢、達成した依頼を書いた後、俺は悩んだ。

所属するギルドについてだ。

支部ギルドに入るだけでもいいだろう。しかし、俺が俺であるという証拠を探すために俺の他に異世界から来た人間なども探したい。

俺のいた世界で有名なギルドは数多くあるが、俺は即座に名前を決めた。

「名前、クズミコウヤ、変わった名前だな。ギルド、蒼炎(そうえん)の劫火(ごうか)か・・・カッコイイ名前じゃないか、登録料は今回の報酬から取らしてもらうよ」

勝手に今回の依頼の報酬金をつかい、新しいギルドをつくってもイヴは何も言わなかった。

蒼炎の劫火とは、俺がいた世界で俺の所属していたギルドだ。

少数ながらも化物ぞろいで知名度も半端なものではない。
俺以外にこの世界に来た者がいるかどうかはわからないがこのギルドを有名にすれば必ずわかるだろう。
思わぬところで目標ができた。
「ギルドをつくるのはいいけど定期的に依頼をこなさないと本部に解散命令が出されるから気をつけな」
人数は一人でも構わないが最低限の仕事をこなさなければならないらしい。
「クズミは終わったけど、お嬢ちゃんはどっかのギルド入ってる？」
「ギルド、ウロボロス・・・」
『え？』
俺とマスターは同時に驚きの声をあげた。
恐らくマスターは俺と別の意味で驚いているのだろう。
「い、いやなんでもない」
急いで言ったのはマスターだった。
永遠（ウロボロス）の象徴。
この名前は、俺の身近な人物と同種の一握りの者しか名乗ることの

できないものだ・・・

第七話　もしも偽りなら

俺達は盗賊退治の報酬である２０万シェリーのうち、ギルド登録料の１０万シェリーが抜かれ、俺達のもとにあるのは１０万シェリーだ。

酒場では軽い食べ物も売られていたから俺達は酒場で夕食を済ませ、帰宅した。

夕食を食べている時も帰り道もイヴはおかしかった。

何一つしゃべらない・・・

夕食を食べている時は、勝手に旅の費用の半分をギルド登録料にした事を怒っているかと思ったが、様子を見る限り違うようだ。

それに怒っているイヴなら勝手に金を使おうとした途端に俺に怒鳴るかと思ったがそうではなかった。

一体イブは何を考えるんだ・・・

思考を巡らしたところでまだ出逢って一日目の俺がわかる事では無かった。

イヴは家に帰っても何もしゃべらずに自分の部屋へ入ってしまった。

本当にどうしたのだろうか・・・

盗賊を退治して旅の支度も整って明日には旅に出る事ができる。

旅に出るのが嫌なのかも知れない。

生まれ育った地から離れるのはさびしいだろう。

もしもこの考えが見当違いなモノでもイヴに聞いて少しでも力になろう。

そう思って俺はイブの部屋とへ行った。

「なぁ、イヴ」

ドア越しに俺はイブの事を呼んだが返事が無かった。

部屋の中から聞こえる嗚咽混じりの声がイヴが泣いている事を俺に知らせた。

「なんで泣いてるんだ？ここを離れるのが寂しいのか？俺が力に慣れる事があるなら言ってくれ」

たぶん俺の声は届いているだろう。

イヴがしゃべりだすのには、ずいぶんと時間が掛かったが俺は待ち続けた。

「私は、ヴァンがヴァンだって信じてる。　けど、山賊退治の時・・・ヴァンは、私の知らない魔法をつかった・・・私が知っているヴァンと正反対の魔法をつかった・・・」

弱い声でイヴはしゃべり続けた。

「あの魔法を見た時・・・私は、もしかしたらヴァンがヴァンじゃないのかもって、あなたが言ってる事が本当なのかもって・・・そう思えてきちゃって・・・」

イヴも俺同様に不安だったんだ・・・

恐らくイブは、山賊退治の際に出した針が俺の隠し持っていた針では無いという事に気づいてしまったのだろう。

その能力がイヴの知るヴァンの使用する魔法と異なり、俺がヴァンでは無いのかもと思い始める。

俺とイブは同じだ。

俺もイヴの名前を覚えていたり、自分の身体が自分のモノじゃないような気がして自分がどっちなのかがわからなくなってきた。ただ、どうしても自分がヴァンだと言うことは、俺の十六年間の記憶がある限り、証拠も無いのに認めたくない。

俺とイブは、お互いの意見が矛盾していて、自分の意見の真実味が無くなっていって、真実が遠のいた様な気がして、段々と不安になっていってるんだろう。

「もしかしたらって思い始めるとヴァンがギルドの事を覚えてなかったりした時にドンドン別人じゃないかってまた不安になっていって・・・」

俺が俺の思っている様に玖澄香夜なのか、イヴの思っている様にヴァンなのかは今の状態ではまったくわからない。

「だから言ってよ！俺はヴァンだって・・・俺がお前を守ってやるって・・・」

イヴは何度も目の前にいるのはヴァンだと心の中で叫び続けたのだろう。

それでもどうしようもなく不安になって、本人からその一言を聴いて安心したいのだろう。

だからこそ俺はイヴび言わなければならない。

「なんのために旅に出るんだ？俺がヴァンである事を証明するためにヴァンの記憶を取り戻すんだろ？もしも記憶が戻んなかったら俺は玖澄香夜だ。それでいいだろ？俺が香夜なのかヴァンなのかの真実を探す旅にすればいいじゃねえか・・・もしかしたら途中でヴァンを見つけるかもしれない。そうしたら二人共本物で万々歳だろ？」

俺はゆっくりとイブに語りかけるように話した。

旅で何か成果が上がれば真実も自ずとわかってくる。

だからこそイブは朝、俺に旅をすると言ったはずだ。

またずいぶんと時間をかけ、イヴは言った。

「そうだね・・・ヴァンが記憶を取り戻せば絶対にヴァンだよね。なら明日から早速行こう。また、二人で記憶探しの旅に出よう」

改めて旅に行く意義を見出して、俺達は旅に出る決意をした。

第七話　もしも偽りなら（後書き）

いいかげん受験勉強しないと不味いです・・・

土、日のどちらかは、できるだけ更新するようにします！

第八話　旅立ち

俺達はイヴが知っているヴァンに縁(ゆかり)がある街を廻る旅に出た。

とりあえず馬車に乗っての移動となったが二日間の移動で乗車料が二人で九万シェリーもかかってしまい、更に二日間の食事を用意したところ所持金はあっという間に無くなってしまった。

1円と1シェリーが同じぐらいの価値だという事はわかったが、そうなるとこの移動代はかなり高いように思えた。

イヴ曰く、馬車での移動は、モンスターに襲われる可能性もあって危険な仕事だから料金が高いのは仕方が無いとのことだった。

どのみち到着したらすぐに仕事を探さなければならないだろう。

色々と考えて暇を潰してみたがあまり時間が経っていない。

今のうちにイヴに色々と聞いた方がいいのだろうか？

俺とイヴ、更に後二人の男女が馬車に乗っているのだが誰もしゃべろうとはしなかった。

恐らく二人もギルドに属しているのだろう。

男性は肩に剣を背負っていて、女性の雰囲気も戦いを知っているような感じだ。

正直この空気であまりしゃべりたくは無いのだが、無言で二日間は、まず俺には無理だろう。

「なぁ、イヴ」

「何？ヴァン」

イヴは昨日の夜の事をあまり気にしていないのか明るかった。

「勝手にギルド作って悪かったな・・・」

「向こうに着いたら十万シェリー分働いてもらうから大丈夫」

「まぁ、金はいくらあっても困らないしある程度は努力する」

俺とイブは他の二人に気を遣って小さな声で話しをしていた。

「なんで蒼炎の劫火って名前にしたの？」

「俺のいた世界・・・イヴの言う夢の中の世界で俺がいたかなり有名なギルドなんだ。もしもそのギルドを知ってる奴がいたら手掛かりになるんじゃないかって思ってさ」

俺の旅をしながらの予定も近いうちに話しておいた方がいいだろう。

「そのギルドにヴァンより強い人はいた？」

俺の世界の事を聞いてくるのは予想外だった。

イブは俺のいた世界の事を信じていないかと思っていた。

昨日の事で少しは俺の言うことも信じるようになったのかもしれない。

「俺が一番弱かったよ」

それを聞いてイヴは驚きの表情をみせた。

事実、人数は少ないが俺以外が化物の様に強くて正直勝てる気がしなかった。

イヴに前の俺は今ほど強くなかった事を話そうとした途端、馬車が止まった。

「なんだ？」

「モンスターだろう」

俺は少し慌てたが他の三人は落ち着いていた。

馬車から降りると周りには４ｍ程の狼が一匹と1、２ｍ程の狼の群れが馬車を囲んでいた。

俺達と同席していた二人は普通サイズの狼を退治していたがすぐに片付いた。

後はボスらしき大きな狼なのだが同席していた二人の顔が強張り加減がボス狼の強さを物語っている。

俺はイブの様子を伺ったが顔は怒りの表情でいっぱいだった。

「せっかくヴァンと話してたのにフェンリル如きが邪魔してるんじゃないわよ！！」

そう言ってイヴはフェンリルに炎を放ち、一撃で跡形も無く燃やし尽くした。

あぁ、イヴはやっぱりヴァンのことが好きなんだな・・・

イヴの怒りの表情を見て俺は悟った・・・

第九話　ヴァンクス

馬車で暇な二日間を過ごしようやく俺達はヴァンクスに到着した。

俺達は金欠を脱出するために酒場へと向かっている。

それにしても馬車での二日間は辛かった・・・

フェンリルを一撃で倒したイヴに対して一緒に馬車に乗っていた二人が畏怖の感情を抱いてしまったようでとても軽く話をする空気ではなかった。

俺も畏怖とまではいかないもののイヴの強さには驚いた。

ヴァンに守ってもらうと何回も言っていた事や山賊との戦闘を見た限りではあまり強くないと思っていたがどうやらその考えは間違いだったようだ。

まさか山賊退治の戦闘が芝居だったとは思わなかった。

ヴァンにお熱なイヴはヴァンに守ってもらうために自分が強いことを隠し、わざと俺が助けなければならない様に仕組んだ。

確かに今考えてみれば、山賊退治の時、イヴが戦闘以外で時間稼ぎをするはずがいつの間にやら戦闘になっていたことも俺がイヴを守らないといけない状況をつくるためにわざとやったという事で納得がいく。

イヴは、恐ろしく強かった。

最初の街、アグニバスでフェンリルの討伐祝いをしていたギルドのメンバーは十名を超えていた。

つまり、イヴは自分の戦闘力で生活ができる者達が十名束になっても簡単にねじ伏せる事が出来てしまうほどに強いのだ。

あの力をぶつければもっと強い敵も倒せただろうし、恐らくこちらの世界に来るまでの自分以上の力は持っているだろう。

そしてイヴが強いことでまた問題が生じる。

イヴは俺にまた旅に出ようと言った。

またという事は以前も旅に出たのだろう。

そして今回の旅はその旅でヴァンと共に行った場所をまわっていくことになるだろう。

ヴァンはイブが相当強いのにそれを超える程の強さを持つ者からイヴを守らなければならなかった。

一体二人の旅に何があったんだ？

「ねえ、大丈夫？」

俺が深い思考へ入っていくと隣を歩くイヴが心配したような面持ちで声をかけてきた。

恐らく何度も俺を呼んだのに返事が無かったのだろう。

「ああ、大丈夫だ。色々と考えてただけだから」

「もしかして何か思い出した？それともこの街が懐かしいとか感じたりしてる？」

別に何かを思い出したわけでもこの日本とはかけ離れた中世ヨーロッパの雰囲気を懐かしいと感じたわけでもなかったのだが、イヴは期待の表情を浮かべていた。

「悪いが何も思い出せない・・・」

「そう・・・。ねえこの街の名前知ってる？ヴァンクスっていうんだよ？ヴァンの名前はヴァンクスからきてるんだよ？」

ヴァンクスからとってヴァンか・・・

「ヴァンの親はずいぶんとこの街が好きだったんだな」

「ううん、その名前を付けたのはヴァンのご両親じゃなくて私なんだ・・・。旅に出る時言ったよね？また記憶探しの旅に出ようって。ヴァンとこの街で出会った時ヴァンは記憶喪失だったんだ・・・。だから私が名前を付けて記憶探しの旅に出たの。」

だからイヴは俺がイヴの事を覚えてなかったことを記憶喪失だと考えたのか・・・

ヴァンは記憶を失った後、自分の名前を知っている相手すらもいなかったのだろうか。

もしかしたらヴァンがイブの家からいなくなったことがヴァンの過去と関係しているかもしれない。

どんどん旅の目的が増えてきてしまった。

第九話　ヴァンクス（後書き）

丁度書き終わった時にＰＣの電源が突然切れて書き直すハメになりました・・・

このサイトは色々な機能があって良いと思いますが自分の作品をお気に入り登録してくれている人達がわかるような機能がほしいです。

誰か感想くださ～い（涙）

第十話　始まりの出会い（前書き）

初のイヴ視点&過去回想です。

第十話　始まりの出会い

私とヴァンの旅はここから始まった。

街の中には露店が多く、皆が笑顔で活気に溢れているこの街で・・・

私が街に持った印象はとても良いものだった。

皆が笑顔を絶やさず、皆が優しかった。

旅人である私に気さくな態度で話かけてきてくれて、何度もこの街の住人の優しさに触れた。

だからこそ私は依頼を受けた。

危険度７０ザバルの討伐。

少し離れた森で巨大な蛇が発見されたらしい。

特徴的にザバルであろうと推測されたまではよかったのだが、この街でザバルを討伐できるものはいなかった。

それも当然のことである。

危険度３０程にもなれば一般的な魔術師が数人がかりで相手をしなければかなわない程の相手なのだ。

ある一定の力差が生まれてしまえば余程の数の優越が無い限り勝つ

ことは叶わない。

ましてや死亡者を出さないなど幻想だと言ってもいいだろう。

街の人々は大金を積んで他の街から強い魔術師を呼ぼうとしたが私は相場よりも低い報酬金で依頼を受けた。

一刻も早くこの街の人々から不安を消してあげよう。

そう思い、私はすぐさま森へと向かった。

森のかなり奥深く、予想通りザバルはいたがそれ以外が私の予想外だった。

ザバルの目の前には男が立っていた。

背は高いがまだ十五歳前後だろうか。

布を纏った銀髪の少年。

明らかにザバルを討伐に来たわけではないことなどわかりきっている。

少年はザバルに敵意を向けずに周りを見渡すばかり。

少年とザバルの目と目が合った時ザバルは少年を丸呑みにしようとした。

「危ない！　逃げて！！」

私はすぐに駆け寄って助けようとしたが少年との距離がありすぎる。
少年は近づいてくるザバルを見て恐怖を感じている様子はなかった。
自分に喰らいつこうとするザバルの顔を触り、そして消した・・・
私はその光景を見て、動くことが出来なかった。
何故ザバルが消えたかは少年が発した異常な魔力で理解できる。
理解できたにも関わらずそれを現実として受け止めることができない。
一瞬にして相手を消す魔法・・・
そんなものがあるわけが、あっていいわけがない。
そして絶対的な魔力・・・
どれだけの素質を持っても恐らくあそこまで強くはならないだろう。
この若さでこの力を手に入れるにはどれほどの死闘を潜り抜けねばならないのだろうか。
どれほど辛い日々を暮らさねばならないのだろうか。
考えるほどに少年は不思議で悲しみに溢れているような気がした。
そして目の前にいる少年は悲しみの表情をみせていた。

「何故悲しむの？」

私は少年の悲しみの表情が気になった。

少年は少しの間、目を瞑ったかと思うとすぐに目を開き、そして口を開いた。

「視えないんだ・・・」

悲しげな声だった・・・

「目が視えないの？」

「いいや・・・、想い出が視えない・・・　俺の名前は何で、どこに住んでて、何をして日々を生きてきたのかがわからない・・・。思い出せないんだ・・・」

記憶喪失。

その一言が私の脳を埋め尽くした。

先ほどの力を見た限り、幾度となく命を賭けた死合いをしている。

その時に記憶をなくしたのかもしれない。

手掛かりになるような物を持っている風でもない。

一体どうすればいいのだろうか。

「何も思い出せないの？」

「男が視えるんだ。黒髪の燃えるような蒼い眼の男が・・・」

その男が少年について何か知っている。

そう思った。

どうせ国々を旅しているのだ。

やる事の一つや二つできたっていいじゃないか。

私とヴァンとの旅は始まった。

第十話　始まりの出会い（後書き）

受験生だと勉強、勉強、また勉強ですね（泣）

テストあったので先週更新せずに1話と2話を編集しました。

受験終わるまで更新速度遅いですがこれからもよろしくです。

第十一話　重なる面影

街から少し離れた森の中、一年前に殺したモノと外見上まったく変化がないザバル達がいた。

一年前、私が討伐したのは一体だったが森の奥には数十匹のザバルが棲家をつくっていたようだ。

ザバルが一匹いるだけでその森は危険区域となってしまう。

今は街を襲うことはないらしいが大喰らいなザバルが子を増やし続ければ、人を襲うのも遠い話ではないだろう。

私も倒すことはできるが闘うと苦戦してしまう相手。

並の魔術師が束になって闘っても勝つことができないザバルをヴァンは次々と屠っていった。

今ヴァンが使用している武器を顕現する魔法は異質だ。

普通の魔術師が武具を顕現した場合、戦闘に不必要な武器はすぐに消す。

しかし、ヴァンの武器が顕現した武器は消せないようだ。

体内の魔力を削り、物理法則を捻じ曲げる魔法又は魔術と呼ばれるそれは炎や雷といったモノを生み出し、操ることが可能というのが世界の常識である。

しかし、物理法則を捻じ曲げている間、術者の魔力は削られ続ける。
これも世界の常識だ。
だが目の前にいるヴァンはどうだろうか。
森に入り、ザバルの群れと遭遇してから一時間程でヴァンが作り出した武器は八つ。
一つでもかなりの量の魔力を奪われ続けるであろうほど強力な武器を八つも顕現させ続けているのだ。
ヴァンの膨大な魔力なら可能かとも思ったが魔力が一気に減り続ける中、平然としていられるわけがない。
ヴァンは世界の法則を一時的に捻じ曲げているわけではない。
世界の法則を塗り潰している。
絶命したザバルに刺さりっぱなしの短剣を見る限りではそう推論できた。
ヴァンは一人でザバル達を屠り続ける。
最初は一体に数十分を要していたが今では瞬く間にザバルを屠る。
その姿を視て私は、思う。
やはりこの人はヴァンなのだと……。

私はこの人と一年間の旅をしたのだと……。

この人が私の愛した大切な人だと……。

第十二話　強すぎる

森の奥、イヴがザバルと呼んでいた巨大な蛇を討伐するため、俺は歩いた。

イヴ曰く、一年前にヴァンと出逢ったのがこの森で、ザバルを討伐しようとしたところ、目の前でイヴのターゲットのザバルを一瞬で絶命させたのがヴァンらしい。

イヴが一年前にザバルと遭遇したという場所に着いてもそれらしい影は無く、その後少し奥に行ったところにザバルと思わしき蛇がいた。

でかい上に多い……。

あちこちの樹に体を絡め、こちらを威嚇する敵意の視線が俺を貫く。

自分たちのテリトリーに踏み入った愚か者を排除すべく、一体が俺を大きな口を開けて喰らおうとした。

俺は瞬時に体内へと気を流し、俺へと向かってくるザバルの尾へと駆ける。

元いた世界に比べ、圧倒的に増加した気が俺の体内を巡る。

一瞬でザバルの尾へと到達した刹那……。

ザバルの尾が俺を体を討ちぬいた。

後方へ吹き飛ばされている最中俺は思う。

強すぎる……。

圧倒的すぎるじゃないかと……。

ザバルがではない。

今の俺が……。

適量な気を体に流そうとしても数倍の気が俺の体内を駆け巡る。

想像するよりも圧倒的な速度でザバルの尾まで到達してしまった俺の筋肉が、俺の脳が一瞬だけ硬直した。

だからこそ俺はザバルの尾を避けることができなかった。

ザバルの尾など気にならない程に俺は戸惑ったのだ。

自分の強さに……。

思考が終了すると再び戦闘へと入る。

体内に流した圧倒的な気のおかげでダメージは無い。

問題はただ一つ。

体が動かしにくい。

気闘なくしてザバルとの戦闘は不可能だ。

気闘を用いての戦闘なら、赤子を抱くような力加減をすればいいのだろうか。

想像を超える動きをした時、また俺は硬直するだろう。

ザバルが毒蛇だった場合、いくら俺が強くても毒が体の中に入ってしまえば死んでしまう。

だからこそ弱く、弱く、力を抑えろ。

俺は自分に言い聞かす。

本気を出すのは攻撃を受ける一瞬だけでいい。

以前の俺よりも今の俺は少しだけ強くなっただけだ。

力を抑えなければ死ぬ。

目の前のコイツは俺を殺すことのできる強敵だ。

第十二話　強すぎる（後書き）

なんか戦闘シーンって書きたいこと書こうとするとかなり長くなりますね。

今回、主人公ちょっと動いて尻尾に吹き飛ばされただけなのに自分的に長くなりました。

強い奴同士の戦闘なんてしたら・・・

わけあって

個人的な問題がありまして、新しいユーザー名『香坂紅』でしばらく活動しようと思っています。
「本当の想い、偽りの想い」は、香坂紅が書く「夢幻の想」のサブストーリーなので
「夢幻の想」がある程度進むまで続きを書くことができないかと思います。
数名のお気に入り登録をしてくださっている方、本当に申し訳ありません。
「夢幻の想」をがんばるのでぜひそちらも一度ご覧になっていただきたいです。
また、「本当の想い、偽りの想い」もなるべくはやく書けるようにしたいと思っています。
多少改稿があるかもしれませんが、おおまかな内容は変えないと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4202i/

本当の想い、偽りの想い

2010年10月20日12時36分発行